2023.8.5 GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

没後50年 巨匠オットー・クレンペラーを聴く

プログラム

今日は、今年没後50年の記念の年に当たる、20世紀を代表する大指揮者のひとり、オットー・クレンペラーを特集します。

オットー・クレンペラーは1885年5月14日、ドイツのブレスラウ、現在のポーランドのヴロツワフに生まれたユダヤ系のオーストリア人で、幼少時にハンブルクへ移住しました。16歳でフランクフルト高等音楽院に入学、その後ベルリンのシュテルン音楽院でピアノと作曲を学びました。1906年にベルリンで、オッフェンバックの「天国と地獄」を指揮してデビューを飾り、翌年にはマーラーの推薦でプラハ・ドイツ歌劇場の指揮者に就任、以後1910年にはハンブルク市立劇場、1913年にバメルン歌劇場、ストラスブール歌劇場、ケルン歌劇場の指揮者を経て、1913年ベルリンのクロール歌劇場の音楽監督に就任、ヒンデミツトやシェーンベルクの新作を上演して成果を上げますが、1933年ナチに追われて渡米し、ロスアンジエルス・フィルの常任指揮者になりました。一方でニューヨーク・フィルやフィラデルフィア管等にも客演し活動の場を拡げますが、1938年に脳腫瘍のため、活動を休止，戦後活動を再開すると，1945年ヨーロッパに戻ってブダペスト歌劇場の音楽監督、1954年から他界するまでイギリスのフィルハーモニア管弦楽団（1964年から1977年までは自主運営組織のニュー・フィルハーモニア管弦楽団）の常任指揮者を務めました。その間、ウィーン・フィルやバイエルン放送響などヨーロッパの名門オーケストラにも客演しましたが、1973年7月6日、スイスのチューリッヒで88年の生涯を閉じました。

クレンペラーは、脳腫瘍や大やけど、転倒による骨折等、次々と事故や不幸に遭遇しますが、車椅子に座って指揮するなど、不幸を乗り切っていき、身体の衰えとは逆に音楽は晩年に向かって巨大化して行きました。人間的には激高しやすく、練習中にかんしやくを起したり、他人の悪口を平気でしゃべったりする性格でしたが、音楽が素晴らしかったため、楽員は必死でついて行ったと言われています。格調が高く、壮麗雄大、音楽的スケール感も圧倒的，クレンペラーはそんな言葉の似合う巨匠でした。 （中川）

＊＊＊＊＊＊＊

リヒャルト・ワーグナー（1813～1883）：
楽劇“トリスタンとイゾルデ”～第一幕の前奏曲

オットー・クレンペラー指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1968.6.16、ウィーン・ムジークフェラインザールでのLive）

エクトル・ベルリオーズ（1803～1869）：
幻想交響曲Op.14～第1、第2、第4、第5楽章

オットー・クレンペラー指揮ニュー・フィルハーモニア管弦楽団
（1966.1.30　ロンドンでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）：
劇音楽“エグモント”序曲Op.84

オットー・クレンペラー指揮フィラデルフィア管弦楽団
（1962.10.27　アカデミー・オブ・ミュージックでのLive）

交響曲第5番ハ短調Op.67“運命”

オットー・クレンペラー指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1968.5.25、ウィーン・ムジークフェラインザールでのLive　グラモフォンCD盤）

★ホームページアドレス　http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/

曲　目　解　説

ワーグナー：楽劇「トリスタンとイゾルデ」第一幕の前奏曲

ワーグナーは少年時代に文学に熱中し、のちにベートーヴェンの作品を聴き、感動して音楽家を志しました。各地の歌劇場指揮者として武者修行のすえ、ドイツ最大の歌劇作曲家となりました。「トリスタンとイゾルデ」は1857年から1859年に作曲、中世のトリスタン伝説に基づくシュトラスブルクの叙事詩「トリスタンとイゾルデ」を題材とした自身の台本による3幕のオペラです。1865年6月10日、ハンス・フォン・ビューローの指揮によりミュンヘンで初演されました。「騎士トリスタンはイゾルデの許婚者モロルドを殺害。イゾルデは仇のトリスタンを殺そうとしますが、逆に恋するようになってしまいます。ふたりは自殺しようと毒薬を飲みますが、それはイゾルデの侍女ブランゲーネによってすり替えられた媚薬だったため、ふたりの愛はさらに強まります。しかしマルケ王の忠臣メロートの策略によってトリスタンは命を落とし、イゾルデも至上の愛を感じながらあとを追って息絶えるのでした。」1849年ワーグナーはチューリッヒにあるオットー・ヴェーゼンドンクの家を提供され、夫婦でそこに住みはじめました。しかし冷めきっていた結婚が不幸で、真の愛の幸福を作品で表現したいという想いをヴェーゼンドンク婦人のマティルデに見い出していました。この事がこの作品を生む切っ掛けとなりました。トリスタン和音と呼ばれる半音階和声の連続によって、激しいまでの愛の姿を表現した楽劇の最初の傑作です。前奏曲は終幕の愛の死と合わせて「前奏曲と愛の死」として度々演奏される名曲です。

ベルリオーズ：幻想交響曲作品14a

フランスのベルリオーズは「標題音楽」という新しいジャンルを確立し、伝統的な形式にとらわれない自由な作品を生み出しました。劇的で色彩的な管弦楽法は、多くの作曲家に影響を与えています。1827年パリでイギリスの劇団がシェークスピア劇を上演、その主演女優ハリエット・スミッソンに心を奪われた事が刺激となって創作力を掻き立てられ、ベルリオーズが女優スミッソンへの激しい情熱を背景にして作曲されたのが「幻想交響曲」です。自身が自殺まで考え悩む狂気から逃れようと作曲したと言われています。ふたりは1833年に結婚するも、その後関係は次第に険悪なものとなって行きます。
「ある青年音楽家は、激情的な欲情の発作に堪えず毒をあおり自ら死のうとする。しかし毒が弱すぎたために、青年は昏睡状態に陥り、奇怪な幻想を見る。」というストーリーは愛する女性をひとつの旋律で表す「固定楽想」として使い、ことごとく病的な青年の脳裏に現われます。1830年4月に完成、その年の12月5日、パリ音楽院で友人のフランソワ・アブネックの指揮で初演されました。巧みな管弦楽法と圧倒的な色彩感で、交響曲史上、特異な位置を占めているベルリオーズ最大の傑作です。

第１楽章　夢と情熱　　第２楽章　舞踏会　　第３楽章　野の風景
第４楽章　断頭台への行進　　第５楽章　ワルプルギスの夜の夢

ベートーヴェン：劇音楽「エグモント」序曲

「エグモント」は文豪ゲーテが1787年38歳の時に完成させた戯曲で、宮廷劇場支配人ハルトルは、戯曲のウィーン上演にあたり、新しい音楽を付けて上演したいと考え、作曲をベートーヴェンに依頼しました。作曲は1809年10月頃から開始され、1810年6月、全10曲が完成、6月15日に音楽付きの上演が行なわれました。圧政者に立ち向かう指導者エグモントと民衆の戦い。エグモントは犠牲になるも、ついには勝利を得るまでを描いています。今日では演奏会形式で全曲が稀に演奏される程度ですが、序曲だけは頻繁に演奏され、コンサートではアンコール曲の定番の一つになっています。序曲は2つの主題が幻想的に絡み合い、愛国の炎が燃えるような勝利のクライマックスを迎えます。

ベートーヴェン：交響曲第５番ハ短調作品67「運命」

ドイツの生んだ偉大な作曲家ベートーヴェンは生涯9曲の交響曲を残しました。第１番は1800年30歳の時に作曲されましたが、第5番ハ短調は第6番と共に8年後の1808年に完成しました。最初のスケッチは1803年に書かれ、何度も練り直して緻密で優れた構造を持った作品に完成させました。初演は1808年12月22日、アン・デア・ウィーン劇場で、ベートーヴェン自身の指揮で行なわれましたが、ベートーヴェンの作品発表会として、他に第6番「田園」、合唱幻想曲、ピアノ協奏曲第4番等も一緒に演奏されました。
「運命」の名称は第1楽章冒頭の主題に対して、ベートーヴェンが「運命はかく扉をたたく」と説明したことに由来していますが、この曲には恐怖、悲劇、争闘といった運命と立ち向かい、溢れる闘志と不屈の精神で運命の波を乗り越える姿が見えてきます。あらゆる交響曲の中で最もよく知られ、愛されている名曲です。

第１楽章　アレグロ・コン・ブリオ　　第２楽章　アンダンテ・コン・モト
第３楽章　スケルツォ．アレグロ　　第４楽章　アレグロ．プレスト